



西日本新聞 文化欄

1988 年九月二十六日~十月八日

無精者が動いて

九州派の運動は美術だけでなく、時代・社会的な側面も大きい。炭鉱の相次ぐ閉山や三池争議、安保闘争……社会の動きにかかわり、あるいは社会をテーマに制作した。美術は時代を反映する。社会が安定してしまうと、画家もそれぞれの殻に閉じこもってしまいがちだ。

熱気が渦巻いた九州派で、すべての行動に参加しながら小幡英資は、どこかさめた目で運動を見ていた。「自分は、こっけいなことを演じている」という気があった。が、熱気が去り、各が自己の世界に戻ったとき、それまで消極的に見えた男は社会や地域にかかわり始めた。地域での手作り美術展など卓抜したアイデアと行動力を見せる。「同時代人であり続けたい」と思う心が、元来は無精な体を突き動かすのだ。

ともに行動し、いくつもの画塾を経営して、金銭にうとい小幡を支えているのが妻の大黒愛子。元九州派のメンバーで、解体後に一緒になってもう二十年になる。

教職捨てて絵に

福岡市荒江に住んでいた小幡は「荒江の旦那」と呼ばれた。「超善としていたから」と言う人がいる。腹をすかせた友人にわざわざドジョウをすくってごちそうする優しさはあったが、どこか頼りないだんなでもあった。

「子供たちがませえていて面白くない」と小学校教師をやめたのが二十六歳のとき、退職間もない三十三年、九州派に加わるが、そこに大黒がいた。

三十五年に東京・銀座画廊での個展を計画。三百号の大作十点に取りかかった。だが会期の四カ月前に急性肝炎で入院して断念。その個展が実現して脚光を浴びていたら、との気があ

る。その年、三十歳で教職に戻るのだが「あのとき、血を吐いてでも描かにかいかなかった。教師も絵も中途半端になった」

そんな思いが募って、結局は教職を捨てたのは四十四歳の時だった。教頭試験を受けるよう勧められて反発したのがきっかけになった。

花、風景、少年画

大黒は1961年の九州派東京展の時、有田から抱えてきた安物の皿をベニヤ板6枚に何百枚も貼り付けた作品に挑んだ。20代前半の女性に「東京に殴り込むのだから、すごい作品を」と意気込ませる力が。九州派にはあった。小幡と菊畑茂久馬(福岡市)が手伝ってくれたのもうれしかった。大黒にとって九州派が青春だった。

二人が寂しさを増すのは、九州派としての活動が終わってからだった。四十三年の第2回九州・現代美術の動向展で、大黒はヒノキの板に何十体もの胎児を描く。大黒はそのとき妊娠していたのだが、完成前に流産した。「あれが私の代表作だった」と言う。

九州派時代は強烈な絵を描いたが、次第に、花や風景、少年など優しさのある絵を描くようになった。「身近なものの触れ合いを大事にしたい」と思い始めたのだ。今は高校生に成長した、二人の子供が生まれたせいもあろう。

楽しみながら

十五年ほど前から福岡市西部の小戸海岸近くに住んでいる。海辺から博多湾が一望できるこの地が気に入った小幡は、小戸の落日のイメージを円や三角で構成し続ける。

五十五年に第1回小戸物産展という風変わりな名の展覧会を開いた。二人が描いた小戸風景や小魚の絵に友人の写真を加え、さらに自ら作ったダイコンやサト芋、海辺の砂や石もオブジェとして並べた。生活を丸ごと芸術に仕立てる試みだ。

五十七年の西区美術展では、旦那の無精さを捨てて会場探し、出品要請、会場作りと動き回った。他区に住む九州派の仲間も数人参加してくれた。これがきっかけで西区役所ロビーの壁画を愛子や数人の画家と制作することにもなる。

五十八年の福岡県知事選の最中には「豊かな県政をアピールする作家展」。激しい保革対決を文化のお祭りの道具にして楽しもうとの試みで、画家、作家、学者ら七十人が自分の作品を持ち寄り、議員たちも顔を見せて文化行政に関する討論も生んだ。

小幡と大黒は、こんな行動をニヤニヤしながら楽しんでいる。たった一人で九州浪漫派を創立、名刺まで作ったロマンチストの小幡は五十八歳。格好の相棒とひょうひょうと遊び心で生きている。

前衛美術の軌跡

九州派から四半世紀

<6>

福岡市

小幡 英資
大黒 愛子

同時代人である うと思ひ続けて

無精者が動いて九州派の運動は美術だけでなく、時代・社会的側面も大きい。炭鉱の相次ぐ閉山や三池争議、安保闘争……社会をテーマに制作した。美術は時代を反映する。社会が安定してしまつと、画家もそれぞれの際に閉じこもつてまいがた。

「アイデア行動力宣言。友人にわざわざ下ジョウを「同時代人であり続けたい」と思つたが、元来は無精な体はあつたが、どこか頼りないを突き動かすのだ。だんでもあつた。」

熱気が渦巻いた九州派で、すべての行動に参加していながら小幡英資は、どこかさめた目で運動を見ていた。「目分は、こつけないことを信じている」といふ気があつた。もう二十年になる。

「たむに行動し、いへつもの白くない」と小幡が教師を退職して、金銭にうとめたのが二十六歳のとき。退職間もない三十二年、九州派に加わるが、そこに大黒がいた。中途半端になつた。

三十五年に東京・銀座画廊で「荒江の巨那」と呼ばれた。超然としていたから、会期の四カ月前に急肝炎で入院して断念。その個展が実



小幡英資さんの近作の前で。左は大黒愛子さん

花、風景、少年画
大黒は三十六年の九州派東京に降り込むのだから、すでに九十年の第一回九州・現代美術の動向展が、九州派にはあつた。小幡

花、風景、少年画
大黒は三十六年の九州派東京に降り込むのだから、すでに九十年の第一回九州・現代美術の動向展が、九州派にはあつた。小幡

と須畑茂久馬(福岡市)が手伝つてくれたのもうれしかった。大黒にとって九州派が青空の血をへん板六枚に齧つた。

二人が親しさを増すのは、九十年の活動が終わつた。四十三年の第一回九州・現代美術の動向展が、九州派にはあつた。小幡

は、巨那の無精者を捨ててと探検し、出品要請、会場作りと動き回つた。他区に住む九州派の仲間も数人参加してくれた。これがきっかけで西沢役所ロビーの壁面を愛子や数人の画家と制作することにもなる。

五十八年の福岡県知事選の最中には「豊かな真政をアピールする作家展」。激烈な保守対決文化のお祭りの道員にして楽しむの試みで、作家、学者ら七十人が自分の作品を持ち寄り、購買たとも顔を見せて文化行政に関する討論も生んだ。

小幡と大黒は、こんな行動を二ヤイヤしながら楽しんでる。たつた一人で九州浪漫派を創立、名刺まで作つたロマンチストの小幡は五十八歳、格好の相棒とひょうひょうと遊び心で生きている。

九州派展 10日まで、福岡市中央区大濠公園、福岡市美術館

吉田浩記者

